

楽しく取り組む説明文の授業をめざして

愛知川東小3年 上野 芳樹

I はじめに

||なぜ、説明文の学習は嫌われるのか||

説明文の学習はきらいだという子どもは多い。国語は好きだという子どもたちでも、物語文に比べて説明文は好きではないということが多い。また一方、教師の側から見ても説明文の指導はやりにくい、という声が多い。つまり、子どもにとつても、教師にとつても説明文の学習は嫌われがちなのである。私自身、正直なところ、説明文の学習は好きではない。

どうして説明文の学習は嫌われるのだろうか。その原因を、これまで説明文の授業をやつてきて私自身が痛感していることをもとに整理してみると次のようになる。

①文章がかたくなるしく、むずかしい。

物語文に比べて、難解な語句も多く、叙述全体に論理性が強調されているため、いつそう難解な文章に感じてしまう。読む力の弱い子は、文章を見ただけで、意欲を失いがちになる。

②知的な読みを強いられる。

物語文では、登場人物の状況、心情を具体的に読み描いていくことが中心になるのに対して、説明文では、「要点・要旨」「段落と段落の関係」などといった知的な読み取りに重点が置かれる。子どもは、そういう知的な学習に生理的に

ついていけない。また、難しすぎる。

③教材としての魅力がない

「要点をつかむ力を育てる」「段落と段落の関係をつかむ力を育てる」などという、技能的な面に重点を置いて教材が選定されていて、内容的には魅力のない文章が多い。教材用に書き替えたために、原文の良さがなくなってしまった教材もある。

子どもたちが説明文の学習を楽しいと感じ、主体的に読もうとするような授業を創るためには、こうした、子どもの読む意欲をはばむいろんな原因に対して指導のたてを工夫していかなければならない。

このレポートでは、私が1学期取り組んだ「ありの行列」(光村)と、「とびうお」(教出)の二つの教材での試みを報告させていただく。

Ⅱ 説明文の学習にどう取り組んだか

① 『ありの行列』での試み

Ⅱ 「手引き」を使って叙述を丁寧に読み取るⅡ

かつて、私が説明文の学習をどうすすめていいのかわからなくて、氷上先生にたずねたことがあった。その時、氷上先生は、

「説明文であろうと、物語文であろうと、基本的には同じ読み方なのでいいですよ。」

と言われた。それ以上詳しくはおっしゃられなかったが、つまりは、「言葉に即して形象を読み描く、ということでは物語文も説明文も同じことなのだ。」ということなのだ。私

は解釈している。

説明文の読みという点、「テーマについて、どのように説明されているか。」といった説明の仕方（問題、結論、論旨の展開、段落構成など）に重点を置いて読むというのが一般的な認識となっている。しかし、説明の仕方がどのようなものか、ということを考えるためには、まず言葉に即して書かれていることがらをきちんと読み取るという作業がなされなければならない。物語文に比べて難解な文章が多い説明文ではなおさらのことである。ところが、いろんな説明文指導の実践を読んでも、その部分に十分な時間をかけているものは少ない。私は、逆のような気がする。むしろ、書かれている事柄を言葉に即してうんと丁寧に読むことで、おのずと、問題の提示、から結論の提示に至るまでの論理の展開も見えてくるのではないかと思うのである。

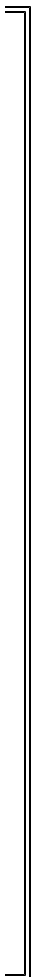
私は、そう考えるようになってから、説明文においても内容そのものの読み取りに最も重点を置いて学習させるようになった。

言葉に即して、一人ひとりが確かに読み取る学習を進めるために、私は、「学ぶ会」で提唱されてきた「手引きを使った個人学習」を実践している。

1学期にやった「ありの行列」では次のようにやってみた。

【手引きを使った一人読み】

まず、全体を読み、わからない言葉や、漢字の読みをざっと1時間でやったあと、次の手引きにしたがって、個人学習をさせた。問題を解きながら読んでいけば、ほぼ大事な内容はきちんとつかめるようになることを目標に手引きの問題を作った。



ありの行列 ひとりベンキョウ

《設問の意図》

★基本的には読めば
どの子もすぐわかる設
問であるようにと考え
た。

① 夏になると、庭のすみなどで、ありの行列をよく見かけます。
その行列は、ありのすからえさのある所まで、ずっとつづいています。
ありは、ものがよく見えません。
それなのに、なぜ、ありの行列ができるのでしょうか。

①ありの行列のようすを、絵で書きなさい。

○
(ありのす)

★★(えさ)

②行列のうしろにいるありは、前にいるありが見えていますか。
見えている どちらかに○
見えていない

③作者は、何をふしぎに思っているのですか。

◎「ありの行列」はどこに、どのようにできるかという叙述を読ませるため。絵に書くことで「行列」のイメージをどう作っているかもわかる。

◎「ありはものがよく見えない」という叙述の確認

◎「それなのに、なぜ」という作者の疑問を読み手の子どもたちにも明確にとらえさせたいから。この疑問が、この説明文全体の出

② アメリカに、ウイルソンという学者がいます。
この人は、次のようにして、ありのようすをかんさつしました。

④この人とは、だれですか。

③ はじめに、ありのすから少しはなれた所に、一つまみのさとうをおきました。
しばらくすると、一ぴきのありが、そのさとうを見つけました。
これは、えさをさがすために外に出ていたはたらきありです。

①どこにさとうをおいたのですか。

ありのすのすぐそば、や、うんとはなれた所は、なぜ、だめなのですか。

すぐそばが、だめなわけ

うんとはなれた所がだめなわけ

発点になる。

◎指示語の指す内容をつかむ力を育てるため。こういう易しい指示語から練習していきましょう。

◎ここからは、読み手の子どもたちをウイルソンに同化させ、実験の経過をウイルソンと同じような実感をもって読ませたいと思っ

た
「少しはなれたところ」には、実験者の意図がある。そこに気づかせたいと思っ

②おいたさとうをはじめに見つけたのは、どんなariusですか。

ありは、やがてすに帰っていききました。
すると、すの中から、たくさんのはたらきありますが、次々と出てきました。
そして、列を作つてさとうの所まで行きました。
ふしぎなことに、その行列は、はじめのありがすに帰るときに通つた道すじか
ら外れていないのです。

①はじめのありがすに帰るときに通つた道すじが、次の図です。
では、たくさんのありが、すから、さとうの所まで行つたときの道すじを書きな
さい。

す◎

さとう

②「ふしぎなことに」と書いています。ウィルソンは何をふしぎに思っているの
ですか。

◎まず、実験の結果が
どうであったのかを確認す
るため。

◎帰ってきたときの痕
跡など何もないのにどうし
てその道がどのありにもわ
かるのかということ。この
実験のようすが具体的に読
めていないとこの設問はむ
ずかしい。

次に、この道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎってみました。

- ① 大きな石はどこにおいたのですか。さっきの図に書きなさい。
- ② なぜ、大きな石なのですか。小さい石ではだめなのですか。

大きい石にした わけ

すると、ありの行列は、石の所でみだれて、ちりぢりになってしまいました。ようやく一ぴきのありが、石のむこうがわの道のつづきを見つけました。そして、さとうにむかってすすんでいきました。

- ① 石で道をさえぎられたありは、そのあと、どううごきましたか。つぎの図に書きなさい。

そのうちに、ほかのありたちも、一ぴき二ぴきと道を見つけて歩きだしました。まただんだんに、ありの行列ができていきました。目とき地に着くと、ありは、さとうのつぶをもつて、すに帰っていきました。帰るときも、行列の道すじはわかりません。

◎ 今度の実験が何をし
らべようとしているのかを
確認するため。

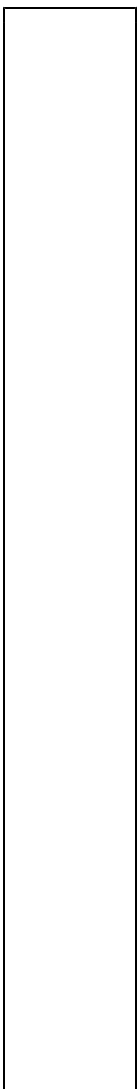
◎ ありの動きを具体的
に読み描かせるため。

ありの行列は、さとうのかたまりがなくなるまでつづきました。

① ありがさとうをはこびつづけた道すじをもう一度、次の図に書きなさい。

④ これらのかんきつから、ウイルソンは、はたらきありが、地面に何か道するべになるものをつけておいたのではないか、と考えました

① 「はたらきありが、地面に何か道するべになるものをつけておいたのではないか」とウイルソンが考えたのは、なぜですか。



⑤ そこで、ウイルソンは、はたらきありの体の仕組みを細かに研究してみました。すると、ありが、おしりのところから、とくべつのえきを出すことが分かりました。それは、においのある、じょう発しやすいえきです。

◎ 最後まで、行列の道すじは、変わらなかったということを確認するため。

◎ いきなり「これらの観察とは何か」と問うのではなく、これまでの読み取りとつなげて子ども自身の頭で考えさせようとした。その上で、そういう内容を総括するものとして「これらの観察」を理解させようとした

① ありは、おしりから、どんなえきを出すことが分かりましたか。

◎ 体を調べてわかった
ことの確認。

⑥ この研究から、ウイルソンは、ありの行列のできるわけを知ることができた。
はたらきありは、えさを見つけると、道しるべとして、地面にこのえきをつ
けながら帰るのです。
ほかのはたらきありたちは、そのにおいをかいで、においにそって歩いていき
ます。
そして、そのはたらきありたちも、えさをもって帰るときに、同じようにえ
きを地面につけながら歩くのです。
そのため、えさが多いほど、においが強くなります。

① はたらきありは、えさを見つけると、どうしますか。

◎ 行列のできるわけが
説明してある。それをきち
んと読み取らせるため。

② ほかのはたらきありは、どうしてえさのある所がわかるのですか。

③ なぜ、「えさが多いほど、においが強くなる」のですか。

⑦
このように、なおいをたどってえさの所へ行ったり、すに帰ったりするので
ありの行列ができるというわけです。
このえきにおいては、ありのしゅるいによってちがうことも分かりました。
それで、ちがったしゅるいのありの道しるべが交わっていても、けっしてまよ
うことがなく、行列がつづいていくのです。

①ありの行列ができるわけをかんたんに書きなさい。

◎「このように」のま
とめの文を読み取らせるた
め。

【手引きを使つての学習をさせてみて】

手引きは、原則として一人でやらせた。ただし、一人ではちよつと難しいという子は、
何人かでやってもよいことにし、また、難しい設問はとばしてもいいことにした。

2時間かけて、一応どの子もやり切らせた。その内容を見てみると、やはり、読みかえせばすぐ書けるような問い(①-1、②-1、③-2など)はほぼどの子もできているが内容を自分なりに理解しないと書けないような問い(①-3、③-1、④-1など)はかなりの子が書けなかった。

そこで、手引きの答え合わせという形で、もう一度、手引きの設問に即して、今度は、みんな考えていった。それぞれに自分の答えを持っているので、話し合いの学習も案外集中してできたように思う。私が思っていた以上の読みも出てくることがあった。

たとえば、「大きな石はどこにおいたのですか。」という設問。

私は、「さえぎる」という言葉に目をつけて、行列の途中に置いて分断したのだとわかってくれればよいと思っていた。実際、最初はそういう考えが出ていたが、ある子が、

「それはおかしい。行く手をさえぎるんやで、列の途中じゃなくて、列の先頭のありの前置いたんだ」と言い出した。確かに、「行く手をさえぎる」という言葉を忠実に読めばそうなる。分断したということの良いのだと思うが、授業では、その子の読みを大きく評価して取り上げてやった。

3時間かけて、内容をていねいに読む学習をした。やった後で思ったことだが、まだ自力で設問を読みながら考える力は弱い3年生の1学期の段階では、手引きの学習の最初から一斉学習でよかったのではないかという気がする。

② 「とびうお」での試み

|| 叙述から自分なりの疑問、類推・論理を生み出しながら読む ||

説明文を読む楽しさは、特に科学的な文章の場合、「未知の世界を知る楽しさ」ではな

いかと私は思う。

「ありの行列」を例にとれば、ふだんよく目にしているありきたりの光景である「ありの行列」が、実は非常に巧妙な仕組みのもとになされているのだという驚き。そこから昆虫、さらには自然界についての新たなまなざしが向けられるようになるだろう。

また、ありの行列ができる仕組みを科学者ウイルソンが実験・観察を重ねて解明していく過程も知的好奇心を刺激する。「ありの行列」を読みながら、読み手は科学者ウイルソンに同化し、ウイルソンの疑問や思考を追体験しているのである。

しかし、私の「ありの行列」の実践は、どちらかといえば、「ありの生態」に触れることよりも、叙述を正確に読み取ることと重点を置いたものだった。

もつと、説明文の描き出している世界に触れること、叙述から想起される様々なイメージ、思考、疑問などを読み味わうことに焦点を当てた授業ができないだろうか。物語文を読む時と同じように、読み手の子どもたち一人ひとりが自己の感性を生き生きと働かせ、主体的に読み進めるような授業ができないだろうか。

そういう考えから試みてみたのが、次に述べる「とびうお」での実践である。

「とびうお」の学習では、最初一読するとき読み手の中に生まれる新鮮な驚き、疑問、感動を生かした読ませ方をしてみたいと思った。それで、これまでいつもやっていた最初の全文通読をやめた。そして、一文、一段落ずつ提示しては、子どもたちの様々なつぶやき、疑問、予想などを語らせていった。

その授業のようすを、記録によって紹介してみる。

【「とびうお」授業記録】

「第1時」

T 「とびうお」と板書

C 先生、それ魚か

龍法 羽みたいのがあって、ジャボーンととぶんや。

T おう、見たことあるかい。

C 口々に言う

和幸 船に乗った時見たことある。

T とびうおって、知ってる人

C 大半挙手

T 知らない人。

C 紗織など数名挙手

T ではね。「とびうお」というものについて勉強していきます。

模造紙に書いた教材文を黒板にはる。

とびうおという魚を知らない人でも、名前を聞いただけで、

その魚のとくちようがわかるでしょう。

C めいめいで読む。「うん、わかる。」などの声

T 直也くん読んで。

直也 読む

勝仁 「とくちよう」て何？

T とくちようというのは、その魚のようす。ほかの魚とちがうところね。

みんなどう、「とびうお」とびうおという魚を知らない人でも、名前を聞いただ

けでその魚のとくちようがわかるでしょう。」て書いてるね。どうですか？
「とびうお」という名前からどんな魚がうかびますか。

C 羽がある。

優子 「とび」て書いたるから、はねたり、とんだりする。

T ああ、とんだりはねたりするんじゃないか。

紗織 かわいい魚。

T ああ、びんびんととんだりするからね。

朝子 体は細いけど、元気

宣彦 小さい魚

有香 はねたり、とんだりできるぐらいやさかいな、すごい体重とか軽いみ

たい。

T ああ、すごいこといわったね。びんびんとびまわるぐらいだから、軽い
んじゃないかって。

「とびうお」という名前から、とんだりはねたりするんじゃないか、体は小
さいけど元気だろう、体重も軽いんじゃないか、てみんなは考えたんだね。

洋志 洋志君はどう。

洋志 羽がある。

T ああ、やっぱり羽がありそうだな。

では、次の文章。これは、1の段落の続きです。

ふつうの魚は、水の中を泳ぐだけですが、この魚は、空中をとぶ
ことができます。

|| C ノートの書き写しながら ||

C ずーっと？

「飛び」よりも「跳び」のイメージで考えている

体重の軽さは、後に説明される。題名から、体重のことまで考えているのはすごいと思った。

「空中をとぶ」というところに

宣彦 空、ずっととんでられるの？

C ジャンプするの。

C 一瞬だけ。

C ピョンピョンいくの。

T じゃあね。今いっばいぶつぶつ言ってるでしょ。

この文章を読んでもと浮かんでくること、「どれぐらいとぶんかな」とか、もっと知りたいこととか、何でもいい。思い浮かべたことを横に書いて下さい。

宏 どういうふうに飛ぶんか知りたい。

T ああ、どんなふうにとぶんかなあ。「空中をとぶ」て書いたるけど。

宣彦 何メートルぐらいとぶんかなあ。

T はい、そんなふうに書いてください。一分間で。

C 書きこみ

洋志 できた。「何メートルぐらいとべるんかな。」

T 何メートルぐらいとぶんかな。うん。

公美 飛んで何するんかな。

T 飛んで、何するんやるな。

和幸 ほら、おもしろいからな。

C 口々に言い出す。

T ちよつとまって。今公美ちゃんは、飛んで何するんやるなて言うてやるんやな。

朝子 あのな、もし、りょうしさんにつかまるとしたら、飛んでつかまらへん

T ああ、飛んで、にげるんか。

麻由 鳥みたいにとぶんかな。

子どもたちの関心が集まる。

短い距離をステップしながら飛ぶものにとらえている子が多いようだ。

飛び方への興味。次の段落に書かれている。
距離への興味。これも後の段落に出てくる。

なぜ飛ぶのかという疑問。これも最後の段落で書かれている。

公美の疑問に他の子が反応してくる。子どもなりの考えをもう少しいろいろ引き出してみたいと思っただが、今は、それぞれが書いたことを発表したいという段階なので流している。

龍法 何センチぐらいの高さをとぶのかな。

和樹 何秒ぐらいとぶんかな。

T ほう。和樹くんは、予想で何秒ぐらい飛ぶと思う？

和樹 ……20秒ぐらい。

由美子 3秒ぐらいとちがって、もっと長く飛ぶ気がする。

T ほう、もっと長く飛ぶんじゃないかって気がする。

はい、じゃ、ちよつとみんな見てください。

Ⅱ「とびうお」の図を見せる。Ⅱ

みんな、どれぐらい飛ぶと思う！

C 2メートルぐらい。

T もっと飛ぶ、という人いない！

C (何人か、教室を動いて示す。)

朝子 私はな、横じゃなくってな、縦に大きくとぶんやと思う。

C 口々に言う

T さあ、そういうこと、知りたいね。

有香 おびれとか、羽を使って飛ぶんやと思うけどな、それをどうやって飛ぶんかしりたい。

宣彦 何でとびうおだけとぶんかな。

C 虫やらを食べてえさにしとるん。

哲也 海の中にな、なんかおってな、食べられるとかなんで。

T おう、哲也くんおもしろいこといった。もういっぺん言うって。

哲也 海の中でな、さめとかに食べられるとかなんで。

なつ希 海の中のこわい魚、さめとかに食べられんように。

朝子 私はな、いきつきみたいに、空気すうとるんやと思う。

T ほうすると、

とくちょうの話合いのあとで、
「とびうお」がどんな形の魚か、
見せるつもりだったが、忘れていた
のでここで見せた。

さめとかにたべられんように飛んでにげるといふ意見と、
飛んで虫食つとるんちがうか、という意見と
ドル平みたいにいきつぎしとる、という意見
さあ、それが、これから出てきます。

略

一段落で様々な疑問、予想などを引き出しておくことが、これからあとの段落を読んでいくエネルギーになる。また、そこでの叙述を感動を持って受け止めることができる。そんなことを意図してこの授業を進めたのだった。

この後、第2段落では、とびうおがどのようなかを読み取った。ここは、とびうおの模型図を使って、実際の動きを叙述に即して再現してみることが書かれています。そして、子どもたちが、一番興味を持ったどれぐらいとぶのかということが書かれています。第3段落を読んだ時の授業は、次のようにやりました。

とびうおが一回にとぶきよりは、だいたい百メートル前後ですが、四百メートルとんだという記録もあります。そんな長いきよりを、海面からの高さ五メートルから十メートルのところをとぶのですから、船の cabin にとびこんでしまうこともまれではありません。

|| 長さについて学校からの距離を例にして具体的にとらえさせたあと、この段落を読んだ感想を出しあってみて。 ||

なつ希 とびうおが、四百メートルもとぶなんて、そんなに飛ぶとは知らなかった。

哲也 そんなにとんでいくのかな。

麻由 他の魚たちとちがうのに、四百メートルもとぶと、よけいめずらしい龍法 十メートルも飛べるなんて信じられない。ふつうの魚やったらちよつとしかとべへんのに

T ほうすると、今、みんなが信じられない、と言ったね。なんで、とびうおだけそんなことができるんかなあ。

C ほら、はねがでっかいで。

T ほう、はねがでっかい。

C むなびれもでっかい。

T じゃ、どうして、とびうおは、他の魚とちがって鳥みたいに飛べるのかその秘密。飛び方は書いてあったけど、四百メートルも飛べるのには、もつと秘密がありそうだね。それが、次に書いてあります。さあ、読んでみましょう。

このように、とびうおが空中をとぶことができるのは、泳ぐはやさがはやいだけでなく、体のつくりが、とびやすいようにできているからです。

写真でもわかるように、とびうおは、むなびれがたいへん大きく、その長さは体の半分以上もあります。このひれが風を受けて、体をうかびやすくしているのです。

この部分は、読めばわかる場所なので、軽く扱って、次の叙述の部

分をていねいに話し合った。

また、とびうおのおなかには、「い」というものはありません。「とよう」がたいへん短くて、口からこうもんまで、一直線につながっています。そして、プランクトンとよばれる、やわらかくて小さい生物を少ししかたべません。食べたものもすぐ消化して、よぶんなものを体の外に出してしまいます。（ですから、とびうおは、体の大きさのわりにかるいのです。） * () の部分は隠しておいて考えさせる。

T (人間の体を使って、胃や腸を説明した後)

とびうおは、とびやすくするためにどんな体のつくりになっているのですか

優子 小さい生物を少ししかたべないから、軽い。

麻由 少ししか食べないし、小さいものしか食べないから、体重が軽いさかいにとびやすい。

智将 胃がないしな、腸も短いしな、よぶんなものもないしな、あんまり食べよらへんで軽いの。

大裕 重たいものをはきださるの。

なつ希 おなかとかには、あんまりよぶんなものがないの。

T 非常に簡単にできてるのね。

和樹 とびうおは、胃もないしな、ちょっとしか食べへんでな、……一直線やで な、すぐ食べたものが……

T 今ええこといわった。

有香 一直線やでな、食べたものがすぐなくなる。

T 人間やったら、食べてからうんちになって出てくるまでに6時間ぐらい

かかるの。だけどとびうおは、いつまでも体の中においとかない。
龍法 わかった。かるいさかい、風受けてよう飛びよるの。

- C (口々に言い出す)
T 重たかったらどぼんと落ちるものね。
では、みんなが考えたことは当たっているでしょうか。
○)の部分を見んなに見せる。

略

【授業を終えて】

第一段落での子どもたちの自由な話し合いから、この説明文で書かれている内容に関するようなものがほぼ全部出たのはおもしろかった。そのことを逆に考えると、子どもがおそらく抱くであろうさまざまな疑問を予測し、きちんとそれに答える内容をもったこの説明文は、3年生の教材として良いものだと言える。

全文を読まずに、先を予測しながら、1文、1段落ごとにていねいに読む、という形の授業は初めての試みであり、振り返ってみると、いろいろ反省することも多いのだが、読みながらいろんなことを発見していく、という仕事はいくらかできたのではないかと思う。

Ⅲ 終わりに

楽しく読む説明文の授業を創ることをめざして、二つの試みをやってみた。私の意図は初めにも述べたように、要点、段落の関係、などといった技能的な側面に偏りがちな、説明文の授業を、読み本来の姿にもどして学ばせてみたいということだった。そのねらいは十分達成されたとは言えないが、一つの問題提起として受け止めてもらえればありがたい。